

「世界の住所の物語」 通りに刻まれた起源・政治・人種・階層の歴史

ディアドラ・マスク:著

神谷栞里:訳

原書房

私にとって「住所」は全く当たり前過ぎて、改めて考えたことなどありませんでした。新聞の書評を読んで興味を持ち、この本を図書館で借りて読んでみました。

「住所」は、国として統治し社会を近代化させるために有効な方法で、歴史や権力、人種、アイデンティティーなどに深く関わっているということを知りました。

現在でも住所の無い場所で『普通に家を建てて住んでいる』人たちがたくさんいることを知りビックリ！しかも後進国ではなく例えばアメリカにもたくさんいるとのこと。住所が無いと銀行も利用できないし公的サービスをうけられないのに、どのように生活しているのでしょうか。しかし税金を払わなくて済むし、警察やいろんなものから捜されにくいし(笑)、様々な縛りから解放されます。実際住所の無いところに普通に住んでいる人たちは何ら不都合なく暮らしていて、住所なんて要らないと言われるとのこと。価値観の違いに驚きです。でも税金をまっとうなことに使ってくれないのだったら、いっそこちらのほうが良いかぁ～。

しかし「住所」は先住民を追い出す手段であったり、統治のために全ての住人を把握する手段であったり、特定の人物を見つけ出し易かったりと、恐ろしいことに使われます。しかしこのいわば各人間に番号を振るという屈辱的な方法による恩恵も多いことに複雑な気持ちになります。

19Cにロンドンで蔓延したコレラは、死亡者の住所を調べ分布図を作ることで発生源を確定でき食い止めることができました。

また、住所の無い地域、例えばインドのスラム街などに住所を振る作業がいかに大変かも知りました。

ドバイには今も住所ご無いということも知り、これまたビックリ！です。つい数十年前まで砂漠だったこの地には遊牧民が居て、彼らには定住という考えが無いからだそう。旅行者にはグーグルマップが必需品なのだそうですね。

知らないことだらけ(私の知識が少なすぎなのかもしれませんが)で、そんな自分にもビックリ(笑)

あと、外国は通りの名前に思い入れがあり、そしてその時々政治や指導者によって通りの名前がコロコロ変わってきたという話が、日本人の私には興味深かったです。本書では日本のことも書いてありましたが、そのところはピンときませんでした。日本についてはもう少し調べてねーと言いたい(笑)

後半はナチスの頃の話やアメリカ南北戦争の頃の話でかなり重たかったので軽く感想など書けません。今でもアメリカの人種差別があることについてその根深さの一端を垣間見ました。住所に関係したことで書かれているけれど、自由の国アメリカの闇の部分に心が痛

みます。現在でも奴隷貿易をはじめとする人種差別に関わる名前のついた通りを改名することは困難なことに他国のことながら胸が締め付けられます。この差別の根深さにぎよっ
とします。そして更に南アフリカの通りの名前の変更もアパルトヘイトが撤廃された後も
いかに困難であるかについて書かれてあります。

「住所」についての話でしたが、最後は上記のような住所に絡めてですが人種差別につ
いて紙幅を割いてありました。

思うのは、全ての子供に平等に教育を行き渡らせたいということです。住所から始まって
読み終わった感想はこれ。住所のメリット・デメリットについての理解も、自国の繁栄につ
いても、地球の未来についても、全ての子供たちに十分な教育、ただし柔軟で片寄らない、
そして思想を押し付けない洗脳しない教育がされること、歴史を正しく振り返る必要があ
るのではないかと思います。そうして少しでも少しずつでも世界が良い方向へ進みますよ
うに。(自分に言い聞かせる！)

2021年1月 星のお姫さま